

認知症高齢者の認知症周辺症状 (BPSD) に対する 心理療法 EMDR によるアプローチ

天野玉記¹⁾, 市井雅哉²⁾

1) 社会福祉法人清章福祉会清住園, 2) 兵庫教育大学大学院

【問題と目的】

認知症を発症した高齢者は、見当識障害を起こし過去の記憶の中に生きようになることが多い。そこで人生の課題を解決せず押し込めたまま認知症を発症した認知症高齢者は、過去の解決されていない課題が現実感を伴って浮かび上がり生淫押し殺してきた痛みを伴う感情が表面化し BPSD となる場合がある。そこで、シャピロ (Shapiro, 1995) が開発した心理療法 EMDR (Eye Movement Desensitization and Reprocessing) でトラウマ的記憶にアクセスし両側性刺激を行うことにより、BPSD の一因となるトラウマ記憶を加速情報処理することができる。さらに、肯定的記憶にアクセスして両側刺激を行う資源の開発と植え付け (Resource Development and Installation: RDI) を併用すれば、重度化した認知症高齢者に対して、否定的記憶の処理と肯定的認知の植え付けを同じセッション内に行うことができる。

つまり、金切り声を上げている BPSD 症状の激しい認知症高齢者は、今まさにトラウマ記憶の再体験状態であると考え、その状態のまま EMDR を行うことによりトラウマ記憶を処理することができ、そしてその後肯定的な記憶にアクセスして RDI を行うことで、実感を伴った肯定的な回想をし、安全・安心感と共に自尊心を回復することが可能ではないかと考える。

そこで本研究は、BPSD の激しい認知症高齢者への非薬物療法の一つとして、EMDR の適用を試みた事例を報告する。

【方法】

罵声・暴言・暴力と徘徊の激しい重度の若年性アルツハイマーの女性 (67 歳) と、爆発的な大声

の多発する脳血管性認知症の男性 (85 歳) において、不穏時に心理療法 EMDR によるアプローチを行った。

【倫理的配慮】

本人、家族へ EMDR 療法について十分説明を行い文書で同意を得た。

【結果】

前者の女性は、EMDR による幼児期のトラウマ記憶の処理により、慢性的な悪態・罵声が少なくなり笑顔が増えた。後者の男性は、「火事の記憶」と「泥棒の記憶」を処理したことにより、長時間続く大声を伴う不穏が大幅に減少した。さらに、回想法的な肯定的記憶を強化する事により安全・安心感を与えることができた。

【考察】

認知症は病因により脳の機能障害が起こり、中核症状である記憶障害や見当識障害などが現れる。BPSD は、認知症の中核症状により個人の心に混乱が生じ、健常時には理性や社会通念上の習慣により抑制された感情が、コントロールを失い表出し始め、様々な行動障害や精神障害に陥っている状態と考えられる。本研究の結果より、EMDR によるトラウマ記憶の処理を行うことにより大幅に不穏症状の改善がみられた認知症があることから、一部ではあるが BPSD の症状改善に非薬物療法として EMDR の有効性が示唆される。しかし EMDR を適用するためには、不穏状態の中でトラウマの再体験によるものを鑑別することが重要である。また肯定的記憶にアクセスする RDI は、クライアントにとって心地良い五感を伴った現実感のある回想法として行うことができ、その効用についても研究される必要があると思われる。

「新編」(1971) 第 1 卷 第 1 号 第 1 号

1971年 10月 1日

第 1 号 第 1 号 第 1 号

第 1 号 第 1 号 第 1 号

第 1 号 第 1 号 第 1 号

第 1 号 第 1 号 第 1 号

第 1 号 第 1 号 第 1 号

第 1 号 第 1 号 第 1 号

第 1 号 第 1 号 第 1 号

第 1 号 第 1 号 第 1 号

第 1 号 第 1 号 第 1 号

第 1 号 第 1 号 第 1 号

第 1 号 第 1 号 第 1 号